

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

トニ・モリスンの『パラダイス』におけるアメリカ建国神話 黒人はアメリカ市民か「元奴隷」か

The American Myth in Toni Morrison's *Paradise*

三井敏朗

MITSUI Toshiro

序

白人がメイン・ストリームであるアメリカを捨て、新たな黒人だけの国を作ろうとする運動はガーヴェイをはじめ多くの黒人指導者によって提言されてきた。しかしかつて彼らの故郷であったアフリカは数世代を隔てたアメリカの黒人を受け入れてはくれなかった。それではアメリカにおいて白人の影響下から離れた、黒人だけの自立した町を作ることは可能なのだろうか。1997年に発表されたトニ・モリスンの『パラダイス』(*Paradise*)はこの問題と正面から向き合っている。肌の色の違いによって迫害を受け、放浪を余儀なくされた黒人の一族がオクラホマの荒野を拓いて黒人だけの町ルビーを作るのだ。

ルビーにはオーヴン (the Oven) と呼ばれる巨大な釜が中心に据えられている。それは町の創立者である始祖たち (the Old Fathers) がかつて共同生活をしていた頃の名残だ。男たちはそれを始祖の苦難をしのばせるものとして大切に、新しい町へと移る際も苦労して運び込んだ。このオーヴンが置かれた広場での集会で、「元奴隷」(ex-slave)という言葉をめぐるのいさかいがある。一人の若者が始祖を指して口にしたその言葉に、大人たちが過剰な反応を見せるのだ。

“ No ex-slave who had the guts to make his own way, build a town out of nothing, could think like that. No ex-slave ”

Deacon Morgan cut him off. “ That 's my grandfather you 're talking about. Quit calling him an ex-slave like that 's all he was. (111) ¹⁾

ディーコン・モーガンの祖父は町にとっては中心的指導者であり、家族にとっては父、夫であり、つまり数十年の人生を背負った一人の人間だった。しかし「元奴隷」という言葉は人間としてのすべての価値を奪い取ってしまう。残るのは白人から卑しまれる奴隷であった、という事実だけだ。「元奴隷」とは祖父を独立した一個の人間としてではなく、白人との関係の中で見る言葉であり、人間性を無視され、酷使された恥辱に満ちた過去へと黒人たちを一瞬にして引き戻してしまう。町の指導者たちはそこから逃れるためにかつて苦難に満ちた旅に耐え、黒人のための自律的な町を作ったのだ。

1973年という設定がなされたこの論争の場面は当時の時代背景が考慮されている。公

民権法成立後、アメリカの社会は大きく揺れた。マルコムX暗殺、「自由の行進」、相次ぐ黒人暴動、「長い暑い夏」、キング牧師暗殺、ニクソン政権への不信。暗殺、暴動、抗議運動。公民権法が成立して数年、1973年は社会が大きく変化しようとしていた時期だ。閉鎖的なルビーにも時代の風は吹きこんでくる。変革の空気を吸ったルビーの若者たちには新しい社会を作り出そうという気概が芽生えていた。しかし、現実の苦しみを知る指導者たちはそれをすぐに信じることはできない。「元奴隷」という言葉は始祖たちの恥辱を表わすだけでなく、ルビーを作ることで捨て、忘れ去ったはずの白人との関係を再び町の中に持ちこむことなのだ。一方、若者たちにとっての過去とは、学校で学ぶ単なる言葉や知識に過ぎない。

アメリカの黒人は「アメリカ人」なのか、それとも「元奴隷」なのだろうか。これはモリスンの他の作品でも繰り返し描かれるテーマのひとつだ。『タール・ベイビー』では伝統的な黒人文化を背負ったサンと、白人世界で成長したジェイディーンが恋に落ちるが、互いを受け入れることができない。また『ソロモンの歌』では黒人が受けた迫害の報復として白人を殺害するギターと、白人の作った経済構造の中でとりあえずの成功を収めているミルクマンとの対立が描かれる。19世紀中頃の奴隷解放以来、白人と黒人の関係を正す法律がいくつも作られ、また社会的な制度も整えられてきた。しかしアメリカにおいて黒人は、その過去を捨て去ることができるのだろうか。モリスンがこのアメリカの中に作り出した黒人の町は、果たしてタイトルが示すような楽園となり得たのだろうか。

1

『パラダイス』はある黒人一族の200年に渡る軌跡を記した物語だ。彼らの歴史は古く、18世紀後半、ルイジアナ地域がフランス領だったころにさかのぼる。その後の幾世代かを通じて独立戦争、南北戦争、二つの大戦とベトナム戦争を体験したその一族は、アメリカの歴史の目撃者だと言える。アメリカがイギリスやフランスの植民地から立ち上がり、一つの巨大な国家へと成長して行く中を彼らは生き抜いたのだ。名前すら持たなかった大陸の隅々までアメリカという文化を塗り広げていった目覚ましい発展の歴史は、一族にとっては憎しみにあふれた歴史であった。

彼らには他の黒人からはっきり区別される特徴があった。色の濃い、漆黒の肌を持っていたのだ。それは彼らに不運をもたらした。奴隷解放後の19世紀後半になると、一族の中には州議会や郡役所での統治に選出される者もいたが、やがてははっきりとした理由もなく追放され、貧しい肉体労働者へと追いやられていく。黒人の大半はホワイト・カラーの仕事に就くことができたが、彼らにそのチャンスがめぐってくることは無かった。1890年には「来たれ、備えある物も、無い者も」という黒人の入居者を募集する新聞記事に新たな可能性を見出し、子供や妊娠した女たちを連れてオクラホマへと旅をすることとなった。一族158人の旅は困難なものだった。途中いかなる土地においても歓迎されず、ひたすら拒絶され、追いたてられたという。

彼らは他の黒人には与えられる権利を奪われ、万人に向けられたはず新聞の記事も、彼らだけは例外であることを教えた。また一族が差別を受けたのは白人からだけではない。

フェアリーというもう一つの黒人の町でも厳しく、屈辱的な方法で拒絶されてしまう。このような迫害を受ける理由は、その漆黒の肌の色にあったと物語の語り手は言う。

Oh, they knew there was a difference in the minds of whites, but it had not struck them before that it was of consequence, serious consequence, to Negroesthemselves. (274)

肌の色による差別とは白人と黒人の間にあるだけだと信じていたのだが、実は黒人の間にもそれは存在した。より白に近い肌をした黒人が、漆黒の肌を持つものを差別するのだ。彼らは生まれつきの肌のために他の町では受け入れてもらえず、さげすまれ、拒絶され、憐れまれて食物を投げ与えられたという。その結果、ヘイヴンの建設者とその子孫は、「自分たち以外は誰も許せなくなった」。この時に植え付けられた憎しみが、後に彼らを作る町に色濃く影を落とすことになる。

この苦難と恥辱に満ちた旅を導いたのが後に始祖と呼ばれる9家族だ。オクラホマ・テリトリーに流れ着いた彼らは、ヘイヴンという伝説的な町を作る。ヘイヴンは一時は繁栄し人口が1,000人を越すほどに成長するが、後には大旱魃などの影響で衰退し、やがては人口も80人にまで減少してしまう。町を支えた農業は衰退し、土地は白人の投機師たちの手に渡っていく。第2次大戦後の1952年には白人の力が入ってきたヘイヴンを離れ、新たにルビーという町を作ることになる。そのときに中心となったのがヘイヴンを作った9家族の直系の子孫であるモーガン家の男たちだ。彼らは「8ロック」と呼ばれ、実質的に町を支配している。

「8ロック」とは密かにルビーの歴史を記録し、家系図を作っているパトリシアがつけた呼び名だ。彼女は次のように説明している。

All of them, however, each and every one of the intact nine families, had the littlemark she had chosen to put after their names: 8-R. An abbreviation for eight- rock, a deep deep level in the coal mines. Blue-black people, tall and graceful, whose clear, wide eyes gave no sigh of what they really felt about those who weren't 8-rock like them. (273)

背が高く、優美な男たちだが、その特徴を最も顕著に示しているのは、始祖たちから譲り受けた漆黒の肌の色だ。8ロックは女子供を守り、放浪の旅に耐え抜いてついに町を作った始祖を崇拜し、その肌を受け継いだことを誇りにしている。始祖の作った基礎を受け継ぎ、その子孫として恥じない町を作ることが8ロックの望みなのだ。

彼らの祖父にあたる始祖がヘイヴンを作り上げるまでの苦難の旅は、ルビーでは半ば神話のように語り継がれている。しかし、町を語る歴史は二つあるのだ。一つはパトリシアが人々から聞いた話の断片をつなぎ合わせて組み立てた記録で、もう一つは8ロックが奉じる伝説だ。パトリシアの記録が始祖たちの屈辱や怒りを具体的に記しているのに対して、8ロックを通して語られる始祖たちは「巡礼者」の様相を呈しており、多分に幻想によって彩られているといえる。8ロックの中心人物の一人であるスチュワードはこの伝説を次の

ように語っている。

ある夜、指導者であるゼカライア（ビッグ・ババ、またはコーヒーとも呼ばれる）が松林の奥で低く歌うように甘美な祈りをささげていると、巨人の歩みを思わせる足音が轟き、木立の中に手提げ鞆を持った不思議な男が現れる。

A small man, seemlike, too small for the sound of his steps. He was walking away from them. Dressed in a black suit, the jacket held over his shoulder with the forefinger of his right hand. His suit glistening white between broad suspenders. (131)

サスペンダーを着け、上着を肩にかけた小男。ゼカライアはこの男の中に自分たちを導いてくれる神を見た。

後にゼカライアとレクタはインディアン土地で再び男を目にする。男は手提げ鞆の中から品物をいくつも出し入れし、彼らの前で姿を消していった。近くでは美しい羽をしたホロホロ鳥が翼にかかっていた。ゼカライアは男がたたずんでいた所を指してこの場所こそが自分たちの土地だと定め、そこにルビーの前身となった町、ヘイヴンを作り上げた。

この伝説は謎に包まれている。始祖たちの進む先々に現れる神出鬼没の男。彼は身体に似合わない大きな足音を立て、ひと言も口をきかずに鞆の中から品物を出し入れし、やがてずっと姿を消してしまう²⁾。確かに神秘的な雰囲気彩られてはいるが、しかしこの男をなぜゼカライアは神だと認めたのだろうか。その根拠ははっきりと語られてはいない。

ゼカライアが語る神は大文字で始まるFatherやGodと記されてはいるが、鞆を持ち上着を肩にかけたこの小男は、いわゆるキリスト教の神のイメージとはかけ離れている。この男は彼らのための、彼らのためだけの神なのだ。男はただある場所にたたずみ、鞆から品物をいくつか取り出した後に姿を消した。それを見たゼカライアたちがそこに神意を読み取り、自分たちを導いてくれる神であると定めただけなのだ。この男にどことなく神秘感が漂うのは確かだが、彼を神と見なし、彼が示した場所を自分たちに与えられたものとしたのはゼカライア側からの一方的な思い込みだったといえる。しかし、それは成功した。男の出現以降、旅は良い方向に向かっていく。あてのない放浪の旅は目的のある、希望に満ちたものとなったのだ。旅はいつまで続くのかという問いかけに、ゼカライアが“ This is God’s time, ” (132)と答えていることからわかるように、彼らは神の手によって導かれているのだ。人間がそれを判断することはできない。すべてを神に委ねてひたすらに導かれて行けばそれでよい。男との遭遇以来、すべての心配や不安は消えた。神を味方に付けてからは希望に満ち、怖れや心配事は無くなり、他人から屈辱を与えられても耐えることができた。

ゼカライアが男を神であると定めたのは信仰心から出たことなのかもしれないし、またはとりあえず放浪生活にピリオドを打つための、半ば意識的な思い込みだったのかもしれない。いずれにせよ彼らの願望により男は神とされ、彼がたたずんでいた土地は彼らのものとなった。このように、8ロックがあがめる伝説の原点とは、突き詰めれば正体のわからない鞆を持った男の存在という一点に集約されてしまう。その男が神であったのか、それともまた別の存在であったのか第三者が明言することはできないのだから、見方を変

えるなら神と運命の土地はゼカライアたちによって一方的に作り出された幻想なのだと
いえるだろう。

この様に見ていくと、黒人の町ルビーの成立史と、アメリカという国家の歴史を重ね合
わせることができる。かつて旧世界ヨーロッパを離れた人々は神に導かれるまま新たな大
陸に土地を拓き、猛威を振るう自然を治めて自分たちの国を作り上げた。そしてそれを自
分たちに与えられた「明白な運命」であるとしたのだ。アメリカという暗黒の大陸に最初
の一步を記した人々は後に「巡礼者」と呼ばれるようになり、彼らの苦難は「ビルグリ
ム・ファーザー」という神話となって語り継がれた。しかしそのような呼び名が生まれ
たのは後年のことだという。現在ではプリマス植民地はビルグリム・ファーザーが上陸し、
アメリカ合衆国の基礎を築いた土地として名高い。しかし独立戦争後に至るまで、プリマ
スに関する逸話や伝説はローカルなもので、アメリカ全体の中では過去の小さな出来事と
して忘れ去られていたという。大西直樹は「そんなローカルな話がなぜ国家神話として祭
り上げられていくのか。それはいうまでもなくアメリカが『国家』の体をなしてきたから
である」と述べている³⁾。神話の中のビルグリム・ファーザーが神に導かれた巡礼者であ
るのなら、彼らを始祖とするアメリカもまた当然神の意志によって作り上げられたもの
なのだ。インディアンのものであった土地を奪い、国を拓いた人々はそのようにして父た
ちの行いを正当化した。新たな国家の構成員である人々にある統一された意識を持たせる
ために神話が利用されたのだ。つまりアメリカという幻想を守るために、神話が利用され
たといえる。

新大陸に渡った白人たちと同じく、オクラホマの僻地にたどり着いた誇り高き黒人の一
族は彼らの神に導かれて、根底に幻想を抱えたまま、この「明白な運命」の下にイン
ディアンのものだった土地を手に入れ、自分たちの町を作り始めた。

2

始祖の意を受け継いだ8ロックは黒人の自律的な町を強固なものにするため、外部との
交渉を断ち町を囲い込む方法を選んだ。そのような閉鎖的な囲い込みを徹底させるには、
8ロックとその始祖たちが絶対的に正当なものでなくてはならない。あいまいな幻想は許
されないのだ。そのためにある操作が意図的になされた。都合の悪いものが次々と町の歴
史から消されて行くのだ。

モーガン家の家系図では、始祖ゼカライアのとりにある双子の弟ティーの名前がイン
クで消されている。始祖の一人であるはずの彼は、ある事件がもて町の歴史から抹殺さ
れたのだ。ある日彼ら兄弟の顔がそっくり同じなのを見た白人の若者から、二人で踊っ
て見せると銃で脅された。ティーはそれに従い踊ったが、拒絶したゼカライアは足を撃た
れてしまう。この事件以来ティーは追放されその存在は抹殺されたが、ゼカライアの方は撃
たれても悲鳴ひとつ上げなかったという伝説になって残された。ルビーの歴史を記録して
いるパトリシアは次のように語っている。

His foot was shot through --- by whom or why nobody knew or admitted, for

the point of the story seemed to be that when the bullet entered he neither cried out nor limped away. (267)

銃で脅されたとは言え、始祖たちの中に卑屈な行動を取った者がいたという事実は抹殺された。誇り高く、苦難に立ち向かう始祖の中にティーのような人間がいては都合が悪いのだ。かわりにその事件は白人の命令に逆らい、苦痛に耐えた人物がいたという伝説を残すために利用された。真実は重要ではない。一つの出来事から何を読み取るのかが重要なのだ。このように8ロックの操作は表にはっきりと現れることなく、密かに、しかし確実に広がっていく。

ルビーにはメソジスト、バプティスト、ペンテコストといった教会があり、信仰の力は強い。しかし彼らの信仰の奥には幻想を守るためのシステムが隠されており、それは始祖の伝説を裏づけするために利用されている観が強い。町の学校ではクリスマスの2週間前に子供たちによる演劇が催される。幕が上がると、舞台では黄色と白の仮面をかぶった4人の宿屋の主人が紙幣を勘定している。そこに子供を連れた7組の聖家族が訪れ、一夜の宿を頼み込むのだが冷酷に拒絶されてしまう。また聖家族たちが見守る中に大きな帽子をかぶった少年が現れ、皮の鞆から包みやピンを取り出して床に並べる場面が演じられる。この劇は一見キリストの降誕劇を思わせるが、実は始祖たちの苦難の旅を再現しているものなのだ。この劇の歴史は古く、教会ができる以前から町ぐるみで行われてきたという。

子供たちによって演じられるその出し物は一見ほほ笑ましいものだが、始祖の放浪を神の意志と結びつけるという大変に重要な役割を担っている。クリスマス・シーズンという人々の信仰心が篤くなる時期に演じられるこの劇の間には、賛美歌やキリスト教のゴスペルである「アメイジング・グレイス」が歌われ、キリストを寝かせたという「まぐさ桶」が小道具として置かれている。また、聖家族を拒絶した宿屋の男たちは、「神がおまえたちを打ち砕くだろう」という言葉（“Strike you in the moment of His choosing!”）(301)に崩れ落ちてしまう。このように始祖の旅は神の導きによる「巡礼」というイメージが強調されている。巧妙なかたちで、始祖たちの旅はより普遍的なキリスト教の神と結び合わされていくのだ。

町にとって今だによそ者であるリチャード・マイズナー牧師は、劇に9組であるはずの聖家族が7組しか登場しないのを不審に思い、その理由をパトリシアに尋ねる。人々はそれについて口を閉ざし、理由を語ろうとはしないが、血が途絶えたり掟を破った一族が次次に町の歴史から抹殺され、最初からいなかったものとされているのだ。この劇には異端者を抹殺する町の意志が反映されており、8ロックの手によって、劇を通して神話が作られ歴史が書き換えられていくのだ。

このようにして始祖たちの放浪は神に導かれたものであり、神をあがめることは、すなわち彼らの放浪は正しく、その土地にたどり着いたのは神意にかなうものだ、ということに繋がられていく。彼らのルールを神の意志にすりかえているのだ。だから8ロックの信仰は始祖の偉業を美化し、彼らがヒエラルキーの上位につく根拠を強化するものだとと言えるだろう。幻想を根底に抱えた始祖の存在が、あいまいで危ういだけに、キリスト教の神と放浪の旅とを結びつけることはたいへんに重要なのだ。これらの人為的な操作によって、始祖は伝説的な人物へと祭り上げられていく。彼らが受けた恥辱でさえも、「神の導き」

を得ることで、栄光に包まれたものとなるのだ。

3

8ロックは支配的なルールと暗黙のタブーのうちに、始祖たちの旅と、それから自分たちの地位を不可侵な物に作り上げようとした。幻想を抱えているが故にそのルールはより強固なものである必要があったのだ。しかし彼らが町と始祖の誇り、黒人の自律性を守るために定めた強固なルールは、また同時に異端者を作り出すシステムでもあった。そのルールを冒すものは、異端者として容赦なく排斥されていく。

8ロックは町に他の人間の血が入るのを極端に嫌い禁じているのだが、パトリシアの父ロジャーはその掟を最初に破ってしまう。ロジャー自身は放浪の旅を率いた家族の子孫で8ロックの一人であったが、掟を破って白人と見間違えるほど色の白い女と結婚したため、彼とその娘で母の肌の色を受け継いだパトリシアはタブーとされた。白い肌を持つ妻は、「人種的に不純」だと見なされたのだ。結局、彼女は難産で苦しみぬいたあげく、町の男たちから助けを拒否されて死んでしまう。パトリシアは正統派の8ロックで漆黒の肌を持つピリー・ケイトーと結婚するが、白い肌は娘のピリー・ディーリアにも遺伝する。スチュワードが「置いてきたクソ」(the dung we leaving behind) (286)であるという白い肌こそが、彼らの苦しみの元凶だ。それはルビーを作るにあたって捨て去ったはずの過去の恥辱を思い起こさせ、誇りに満ちた始祖の像を損なってしまうのだ。

一族が白人と、色の薄い黒人から受けた傷は深く残った。しかし恥辱にまみれ誇りを失った始祖を認めることのできない8ロックは、逆に漆黒の肌の色をこそ上位に置くというヒエラルキーを作り上げた。パトリシアは父にこう尋ねる。

“Daddy.” He must have heard the doubt in her tone. “What?” If he did, it didn’t show. “It was skin color, wasn’t it?” “What?” “The way people get chosen and ranked in this town.” (308)

父は否定するがそれは事実であり、町のタブーなのだ。このヒエラルキーを維持するためには、町によその人間が入るのを極力阻止しなくてはならない。他の価値観を持つものの存在は8ロックが行った囲い込みに亀裂を与えかねないからだ。しかしそれは同時に色の薄いものに対する差別感情を作り出すこととなった。

異端者とされたものは町の中だけではない。8ロックに襲撃されたコンヴェントもまたその標的だった。コンヴェントが敵と見なされた理由はいくつか考えられるだろう。コンヴェントに踏み込んだ男たちは荒果てた家の内部を目にする。乱雑な部屋の中には酒の空ビンが放置され、独身者ばかりのはずなのに、幼児用のおしゃぶりや靴が置かれている。そこに住む女たちは8ロックの持つ女というものの概念を覆してしまうものだった。ローンは、スチュワードが自分の持つ女というものへの幻想を守るために、「不道德」な女たちを抹殺したのだという。牧師であるブリアムはコンヴェントで偶像崇拜の痕跡を見つけ自分の意見が正しかったことを喜ぶ。またルビー内部で8ロックのルールに外れた女たち

はみなコンヴェントに逃げ込んで行った。それぞれの理由が折り重なって結局コンヴェントは襲撃され抹殺されるのだが、その根底には誰もが納得する共通の敵が必要だったから、という理由があるのではないだろうか⁴⁾。「これらの大惨事全部をつなぐ一つのもの、それはコンヴェントにあった」(the one thing that connected all these catastrophes was in the Convent) (14) という。この一言でコンヴェントは敵と見なされた。共通の敵を目前に作り出すことで、分裂しかけていた町は一つに固まっていく。モーガン家とフリーウッド家の確執はうやむやになり、問題を抱えていた3つの教会は一つにまとまることができた。ルビーが欲していたのはとりあえずの、目前の解答だ。

異端者は排除されねばならない。ルビーの価値観と対立するものはことごとく抹殺されねばならない。8ロックが作り上げたルビーという楽園は“the unsaved, the unworthy, and the strange” (435) がいないことによって定義される、とマイズナーは述べている。実際は、ルビーがそれらの異端者を生み出さなかったというわけではない。ロジャーの妻やコンヴェントの女たちのような異端者は存在が許されず、ただひたすらに排斥されてきただけなのだ。しかし、幻想が存在の根源となっている8ロックは、その存続のため常に異端者を必要としているともいえるだろう。確実な基盤を持たないため、常に何物かを判断の基準に置いて自らの価値を確認しなければならないのだ。

4

モリスンはエッセイ *Playing in the Dark*⁵⁾ の中でアフリカニスト⁶⁾ という観点について述べている。それはモリスン流の反植民地主義宣言ともいうものであり、サイドが語るオリエンタリズム⁷⁾ をアメリカの白人と黒人の関係に持ちこんだものだ。アメリカ独自の文化と文学は黒人の存在と全く関係ないと常々考えられてきたが、黒人は「アメリカ」を成立させるためにぜひとも必要であったというのだ。

旧世界の束縛と制限から逃れた移民は、アメリカに渡り自由のための新世界を作った。しかし、モリスンは「自由と言う概念は真空からは生まれてこない」(The concept of freedom did not emerge in vacuum.)⁸⁾ という。自然の脅威に囲まれた未開の大陸で、若きアメリカはその自由で力強い「アメリカらしさ」(Americanness) を規定するために、「黒人奴隷」という存在を必要としたのだ。奴隷制ほど自由を際立たせるものはないからだ。モリスンは次のように述べている。

This black population was available for meditations on terror --- the terror of European outcasts, their dread of failure, powerlessness, Nature without limits, natal loneliness, internal aggression, evil, sin, greed. In other words, this slave population was understood to have offered itself up for reflections on human freedom in terms other than the abstractions of human potential and the rights of man.⁹⁾

黒人は「拘束されたもの」、「悪」の象徴として必要とされたのだ。またポーの *The*

*Narrative of Arthur Gordon Pim*を通じて色に関するイメージが論じられる。作品に現れる影、闇、黒さというものは死や恐怖を暗示し、それに対する白は解毒剤や瞑想の意味を持っているという。(these images of blinding whiteness seem to function as both antidote for and meditation on the shadow that is companion to this whiteness)¹⁰⁾つまり黒人はアメリカ文学の中で「拘束されたもの」、「邪悪」という役割を持たされ、「自由」で「善」なる白人のアメリカを浮かび上がらせるために利用されてきた、というのだ。アメリカ文学は邪悪な黒い肌を持ち、自由を拘束された哀れな黒人という異端者を必要としていたともいえるだろう。アメリカはそのアメリカらしさを作り出すために、黒人という他者を必要としたのだ。アメリカにおける黒人は他者性をもってアメリカという国家を成立させ、その社会に組み込まれているのだ。

この様に見ていくと、アメリカとその中に作られた黒人の町ルビーとが重ね合わされているのに気がつく。『パラダイス』では8ロックと異端者との間に同様の関係が示されている。「8ロック」という幻想の上に作り上げられた階級は、8ロックでないもの、すなわち旋に外れるもの、肌の色の薄いもの、始祖と血縁にないものによって定義されているのだ。『パラダイス』はモリスンのアフリカニスト理論を作品に応用したものだといえるだろう。ルビーが異端者の存在によって成立しているように、アメリカもまた黒人という他者を作り出すことで成立しているのだ。そのような構造を持つアメリカでは、黒人は常に白人を成立させる他者として必要とされている。ルビーが犠牲者を必要としたのと同様に、アメリカもまた黒人という犠牲者を要求した。アメリカがアメリカとして成立し続けるために、黒人はやはり「元奴隷」という過去を背負っていかなければならないのだ。

結 論

8ロックの存続のために異端者は排除されねばならない。しかし異端者の消滅は同時に8ロックの存在基盤を失わせてしまった。コンヴェントの襲撃後、ルビーは大きな転換期を迎えることになる。8ロックは力を失い、彼らが作り上げてきた特色は町から消されていく。ルビーは他の田舎町と変わらなくなるだろう。テレビが導入され、他の町との連絡道路が建設され、次々に他所の人間が入り込んで去っていくようになるだろう。

一族の安全のために作られた8ロックのルビーは崩壊した。マイズナーによればそれは「不必要な失敗」(an unnecessary failure) (435) だった。8ロックは自分たちを守るために他の町から孤立する方法を選んだ。そのようにして「自」を囲い込んだ結果、必然的に「他」が生じ、それは憎しみに彩られることとなった。人種差別から逃れて作った町は、皮肉なことに人種差別によって成立する町となってしまったのだ。

ルビーはその成立のために多くの犠牲者を作り出した。しかし、その町を作るに至った黒人の一族もまた、アメリカという国家を成立させるための犠牲者であった。彼らのルーツは18世紀、アメリカ独立の前夜にまでさかのぼる。アメリカの誕生をその目で目撃し、その国家と成長をともした彼らはしかし、白人たちから奴隷として蔑まれ、仕事を追われた。また戦争のたびに駆り出され、ルビーではモーガン家の二人の息子がベトナム戦争で命を落としている。

自由の国アメリカを成立させるための犠牲とされた一族は、憎しみに縛られまた別の犠牲者を作り出した。マイズナーが「彼らは白人を出し抜いたと思っているが、実は白人のまねをしていただけだ」“ They think they have outfoxed the whiteman when in fact they imitate them.” (434) と語っているように、8ロックは白人の世界から逃れようとして、それを模倣していたに過ぎない。実は白人が作り出してきたシステムにすっかり組み込まれていたのだ。

異端者とされたパトリシアが町の裏側の歴史を記しているように、輝かしいアメリカ発展の裏側を知っているのは彼ら黒人なのだ。それは異端者を作り出すことで成立している世界だ。8ロックは自らの利己心のために自滅の道をたどった。しかしそのような過ちを犯した彼らに対してモリスンの目は時にやさしい¹⁾。それはある種の同情だといえるかもしれない。8ロックの苛立ちを募らせるのは、表面的な平和の中に埋もれていく人々だ²⁾。時代が移り変わるとともに変わっていく若者たちは、家族のために戦った始祖たちを崇拜しようせず、もはや単なる飾りになってしまったオーヴンに落書きをする。新しい秩序を持った女たち。実用的な野菜作りより、見栄えのよい花壇ばかりを作るようになった妻たち。憎しみに満ちた過去は忘れてしまうべきなのか、それとも常に胸に秘めておくべきなのか。

理性の光に照らせば悪となる8ロックの行為だが、モリスンはただ単に彼らの破滅の理由を描こうとしているのではない。幾代にも渡る一族の歴史を通して、実際の歴史上の出来事を羅列しただけでは伝えることのできない、憎悪の歴史をモリスンは訴えているのだ。なぜ、彼らはそのような道を進まねばならなかったのかを、文学という手法を通して、その奥に流れる感情の面から描き出しているのだ。

注

- 1) Morrison, Toni. *Paradise*. New York: Random House Large Print, 1998. p.8.
以下カッコ内の数字は本書よりの引用ページを示す。
- 2) Kubitschek は『パラダイス』は超自然的なものを認めるアフリカ人の伝統的な観念に基づいて書かれたものとしており、「歩く男」は “ a supernatural force embodied in a small man, , , . ” であると述べている。(Kubitschek, Missy Dehn. *Toni Morrison*. : Greenwood Publishing Group, 1998. p.166.)
- 3) 大西直樹『ピルグリム・ファーズという神話』講談社、1998 p.122
- 4) Bentはこの襲撃は必然的なものではなく、最後に女たちが戻ってくる場面を設定するための必要性から設けられたものだと述べている。

The murders seem prompted less by the men's depravity or indignation than by the author's pragmatic need for those ghosts in the final. (Bent, Geoffrey. Less Than Divine: *Toni Morrison's Paradise*. Southern Review.35.1 winter. 1999. p.147

- 5) Morrison, Toni. *Playing in the Dark* : Whiteness and the Literary Imagination. New York: Random House, 1993. p.

6) モリスンはアフリカニズムについて次のように説明している。

Rather I use it as a term for the denotative and connotative blackness that Africans have come to signify, as well as the entire range of views, assumptions, readings, and misreadings that accompany Eurocentric learning about these people. (ibid. pp.6-7)

7) サイドはオリエンタリズムを次のように説明している。

「オリエンタリズムとは、オリエントを扱うための オリエントについて何かを述べたり、オリエントに関する見解を権威づけたり、オリエントを描写したり、教授したり、またそこに植民したり、統治したりするためのもの 同業組合的の制度とみなすことができる。簡単に言えば、オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式^{スタイル}なのである。」(エドワード・W・サイド 今沢紀子訳「オリエンタリズム」(上)平凡社、1993、p.21)

8) PD. p.38

9) PD. pp.37-38

10) PD. p.33

11) モリスンはamazon.com.のインタビューに答えて次のように語っている。

These people (8-Rock) have an extraordinary history, and they were sound people, moral people, generous people. (カッコ内著者)

12) 荒このみは8ロックたちのこの苛立ちがコンヴェント襲撃の一つの引金になったと述べている。

黒人はこのアメリカ社会でどう生きのびられるのか。もはや新しい世代は何も感じず、何も考えなくなってしまったのだろうか。おそらくモリスンが感じているのはそのような黒人の穏やかさにちがいない。精神的な戦いを止めてしまったのか。オーヴンが黒人の「心」と「頭」を、「感情」と「精神」をあらわしていた時代は終わってしまったようなのだ。このままでよいのか。それがルビーの男たちのコンヴェント襲撃への衝動でもあったのだ。(荒このみ『アフリカン・アメリカンの文学「私には夢がある」考』平凡社、2000、p.204)

参考図書

David, Ron. *Toni Morrison Explained: A Reader's Road Map to the Novels*. Random House: New York, 2000

Lubiano, Wahneema. ed. *The House That Race Built*. Vintage: New York, 1998.

Storage, Patricia. *The Scripture of Utopia*. The New York Review, June 11, 1998.

加藤恒彦『トニ・モリスンの世界 語られざる、語り得ぬものを求めて』世界思想社1997

藤平育子『カーニバル色のパッチワーク・キルト』学芸書院1996